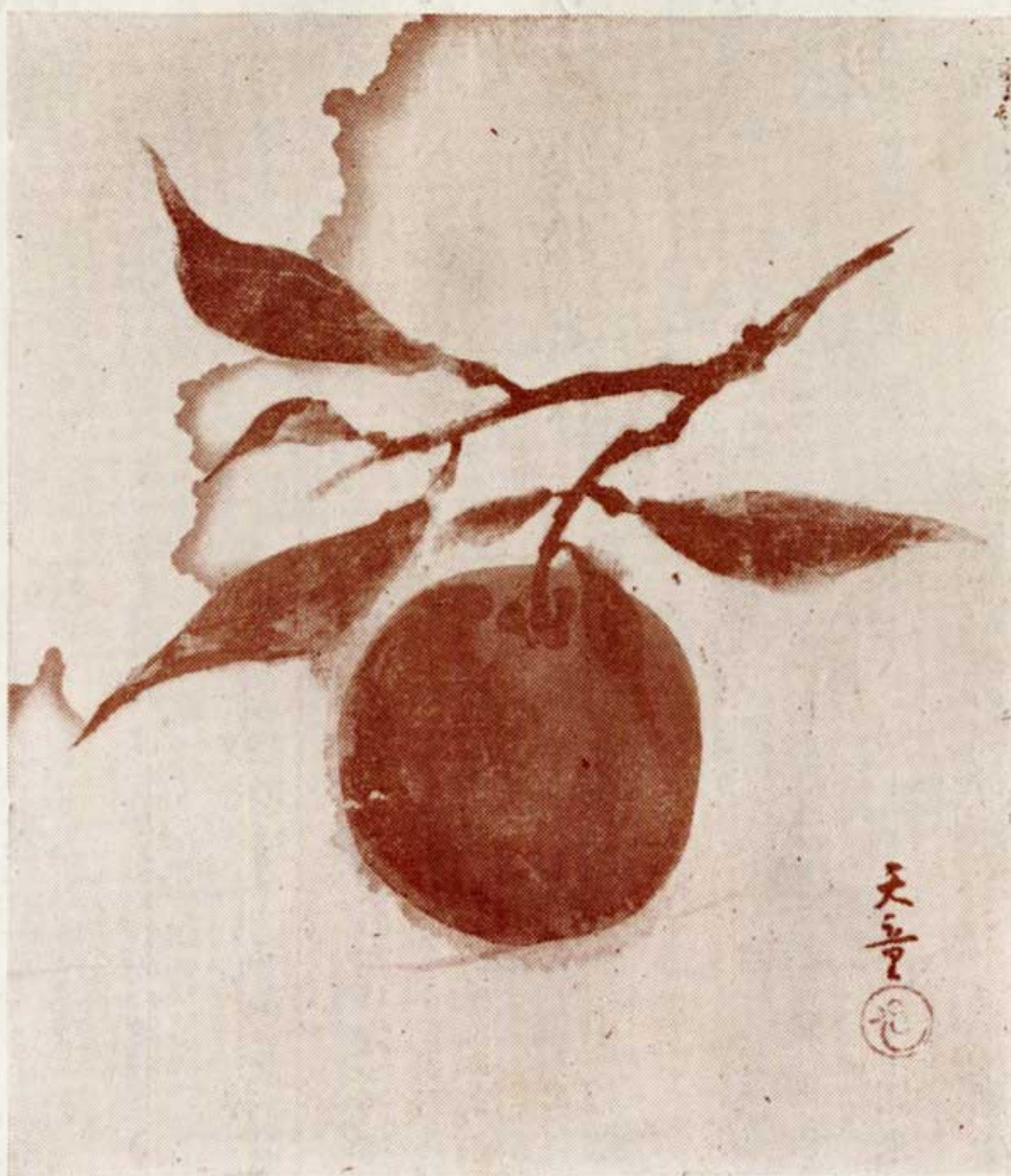


土 淨



八月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認雜誌第三五二號
昭和三十三年七月二十五日印刷 昭和三十三年八月一日發行

第二十三卷

第八號

御歌

おぼつか
かな

たれか
たれか

いひ
げん小松
とは

雪を
さゝ
ふる

高松
の枝

目次

巻頭言……………(1)

鑽仰法然上人……………林隆碩(2)

歴史の上から見た宗教の在り方……………高柳光壽(5)

彼岸と浄土教……………松崎可定(9)

生の宗教としての念佛三昧……………權藤賢祐(13)

物の考え方……………松濤弘道(16)

小説 津戸三郎……………鶴田湛泉(21)

金光上人(二)……………開米智鎧(17)

阿彌陀經の理解(三)……………福富海岳(28)

卷頭言

八月九日に増上寺で原爆ギセイ者の追悼會が行われた。長崎へ原爆の落ちた日でもあつたので、法要の様子が各新聞に寫眞入りで報道されたのである。又この追悼會に多くの外人が參列焼香して、國際的な平和の祈りとなつたが、これは八月六日から東京神田の學士會館で開かれていた第三回原水爆禁止世界大會の豫備會議に、世界の各地から參加した廿七カ國八十三人の外國人の參列があつたからである。私は、原爆ギセイ者の追悼が、佛教徒の原水爆反對の意味を明にし、それが國際的に表明されたものとして意義深く考える。

今回の原水爆禁止豫備會議で、世界各國の代表者の三分の一は婦人であつたこと、とくにイギリス代表キース夫人が「原水爆實驗の害を受けない子供を産みたい。それが私達の運動の目的である」と述べた（朝日新聞）ことを知つて人間の母胎を守る爲めに、佛教徒として、又宗教家として、じつとしていられない衝動を感じるのである。

然し、今度の會議でも、主催者である日本側では、これだけの會が行われるのに、各層の組織がこぞつて參加する氣配は感じられずして、僅かに元東大總長の南原氏がピカ一の出席者の感があつた。このことは、寔に残念なことであるが、日本における原水爆反對運動が最初は左翼的な反米政治運動の意味があつて、全國民的支持が得られなかつたことに原因するものと思われる。然しながら、今日は最早、そのような運動の發端などを考えたり論議したりしてゐる時代ではない。

原爆の理論は人間が見出した科學的な大發見であつてこれを有効に用いれば無限に近い利益があることが知られてゐるのに、殺人器に利用する爲めに、優秀な科學者の頭腦とばく大な財力をかけていることは、如何んとしても残念なことである。然もこれは科學上の問題でなく科學を用いる人間の心の問題である。佛教的に言へば我心から發する害心の煩惱であるし、キリスト的には原罪の現はれであらうか。人間の心を清めるものはいまや宗教以外にはないやうである世界の爲政者の僅か數人の心を宗教的にめざめさせることが出來ればよいのである。ソ連の指導者は或いは無宗教者と言へるとしても、他の國の政治家はキリスト者と思われるが、神の教も惡魔の誘いを持ちあぐんでゐるのであらうか。

原水爆禁止豫備會議に出席したインド代表のチャンドラー氏は「原水爆實驗が行われてきたのは、アジアの土地アジアの海、そしてアジアの空だ。久保山さんはアジア人だ。このことをアジア人は忘れない」と叫んだ（朝日）と言われる。現在原水爆を所有しないのはアジア人で、そのアジアの宗教は佛教である。佛教徒は原爆禁止を強く主張すべきである。（佐藤密雄）

鑽仰 法然上人 (三)

——法然上人の隱遁について——

林 隆 碩

黒谷いんとん

「惠解天然にして透逸のきこゑあり、四教五時の廢立、鏡をかけ、三觀一心の妙理、玉をみがく、所立の義勢殆んど師の教に超へたり」

これは勢至丸の智的代表の文である。

「生年十八歳にして、西塔黒谷の慈眼房の廬に入りぬ、幼稚のむかしより、成人の今に至るまで、父の遺言わすれがたくして、とこしなゑに隱遁の心、深き由をのべ給ふに、少年にして、はやく出離の心をおこせり、まことに法然道理の聖なりと隨喜して法然房と號す」

これは勢至丸の、道心の代表的一文である、

勿論、當人の勢至丸にあつては、此二者は混然として一體密接不離なるものであらうが、其の不可離のものを分解して、その何れが基調をなすものかと究明すれば、道心に満ちた所が立脚基礎と仰くべきであります、此點に關して

勅傳の記者といさゝか其の見解を異にすることをかなしみます、舜昌法印の筆勢は、智慧が基本であるように推察されます、これ私の與し難き點であります、觀覺得業が小兒の器量を見て、如何にもたゞものにあらずとし、持實房源光が、同様に、此小兒、いかにもたゞものにあらずと驚嘆された、これは智的におどろいたのである。

法性寺忠通が鳥羽の造道に於いて、此小兒、いかにもたゞものにあらずとおどろいたのは、何等學問上のことには觸れていない、しかもたゞものにあらずと感嘆した所に、頗る意味深長なるものがある、私は、觀覺や源光が歎稱に勢至丸の眞面目を窺はんよりは、法性寺忠通のそれに隨喜すのものである、形式的には、雙眼放光の奇瑞に驚かれたのであるが、内面的には、小兒の舉體が求道の結晶に見へたのである、此の求道の赤誠が、放光となつて表はれたもので、それに殿下は、低頭、合掌なされたのである。

そも／＼勢至丸の求道、道心が如何にして斯くあらしめ

たか、其の生起の由來を考ふるに、二個の理由がある。

第一は、先天的本有的である。これを古來より生得自然の發心と申している、焰は天に上がり、水は下りまさになる、菓子の中にすきもあり甘きものあり、これ等は法爾の道理、天然自然である、勢至丸は天然と道心深く誰れのすゝめを待たずに發心をなされたのである。

第二は父君の遺言である、御傳を案するに、上人の父は偉らすぎるほど偉らかつたのである、由來日本人は復讐心の強いことは昔も今も非常なるものである、一度うけた仇は二十年三十年も忘れずに必ずこれに酬ゆる。父の仇は子が孫がといつたやうに仇と俱に天を戴かずといふ思想が國民のすべてに殖へつけられてある。此の中にあつて、而かも、復讐心、鬭爭心、敵愾心の最も旺んであつた、源平諍亂前後にあつて、わが敵を打つなといふ様な偉らい詞を、渺たる一介の田舎侍の口から吐かれたといふことは、空谷のあし音といふべく眞に驚歎に価するものである、又キリストの

「爾の隣りを愛しみて、其の敵を憾むべしと言へることあるは、爾等が聞く所なり、然も我、爾等に告げん、爾等の敵を愛しみ、爾等を誼ふものを祝し、爾等を憎むものを善視し、虐遇迫害ものゝために、祈禱せよ」

の偉大なる精神とも同様であつて、佛基兩教の玄底を衝くの御教である、上人の父は一介の武人であつたとは云へ宗

教的修養、佛教的體得に於いては容易ならぬお方であつたとみねばならぬ、此の亡父の餞別の遺言が、云何に勢至丸を動かしたかは、蓋し想像已上のものがあつたのである。悲母を勧誘し玉ふ詞にも、就中、亡父の遺言、耳の底に留まりて、心の内に忘れず云々と萬事を知り盡し知り抜いてめさる母堂にさへ父の遺言をくりかへされている、さらに、十八歳の黒谷の隱遁に際して、幼稚の昔より成人の今に至るまで、父の遺言忘れがたく、永えに隱遁の心ふかき由を述べ玉ふてある、されば勢至丸にあつては、片時も忘れてならぬものは亡父の御遺言であつた。即ち文にいふ。

「汝さらに會稽の耻を思ひて敵人をうらむることなかれ、これ偏に先世の宿業なり、もし遺恨を結ばゞ、そのあだ世々につきがたかるべし、しかじ早く俗をのがれて、家を出て、我が菩提を訪らい、自の解脱を求めよ」

で、ある。此の遺言に三要素が盛られてある、怨視平等と、父の菩提と、自身の解脱である、この三つは一見、三元的に見ゆるが其の實は一元であつて、眞實に自己が解脱することが、そのまゝが父の菩提であつて、又それが怨視平等の一如の世界であるからである。

しからば 云何にして自身の得脱を計かるか、云何にして生死を出離するか、この全身全靈の要求が形としては隱遁の姿である、皇圓阿闍梨に、

われ、閑居を願ふことは、永く名利の望をやめて、靜に

佛法を修學せんがためなり、又云

なほ、これ名利の學業なることを厭ひて、忽ち師席を辭す云云

此の二文は勢至丸の隱遁精神を云ひつくしている、

如上是勢至丸としての求道隱遁捨世の根據を勢至丸それ自身、又は家庭に求めたのであるが、已下は、法然上人としての隱遁の理由を視野を擴げて、歴史的、社會的、教會史的に視れば、如何様に觀らるゝを述べんとするものであるります。

×

×

勝てば恨を受くるべし

負くれば心やすからじ

勝と負けとを越ゆる身は

夜半のねむりも圓かなり

(法句至)

×

×

散る花に残る言の葉なかりせば

此の御法りにはいかで遭ふべき(隆圓)

聖語

いのち

人のいのちはまことに短小にして、百歳をこゆるものは、甚だすくない。たとえ百歳をすぎて生くる者といえども、彼もまた老のために死なねばならぬ。

たとえば夢の中にて會いたるものを、さめてのち人は見ざるがごとく、かくのごとく、愛するひとびとをば、命終すれば見ること得ぬであらう。その名を某々と云われし人々、その名を世間に喧傳せられし人々も亡じてのちは、その名のみが彼らを語るべく残るのみであらう。(老經)

歴史の上から見た宗教の在り方

高 柳 光 壽

祭政一致という言葉は古代宗教のあり方を現わした言葉である。それは政治が宗教と一緒にあつたことをいつたものであるが、宗教と一緒にあつたものは決して政治ばかりではない。學問も藝術もまた宗教と一緒にあつたのである。そしてこのようなことは獨り日本ばかりではなく、世界諸民族同様の事柄であつた。

(5)
日本では日本書紀によれば、垂仁天皇の二十五年に伊勢の渡會わたらいに宮殿を造つて天照大神を祭ることによつて、一まづ祭政の分離を見たのである。すなわち從來は天照大神は天皇と同殿同床であつたのが、こゝに至つて別殿別床となつたのであり、神を祭ることは祭祀であつて、それは政治ではないという觀念にまで發達したのであり、天皇は政

治をする。神を祭るのは倭姫命やまとひめのみことが當るということになつた。宗教と政治とが分離したのである。こゝに私は日本國といつたが、それは大和朝廷のことで、諏訪で祭政が分離したのは鎌倉時代の末期であつたように思う。そのように所によつて區々であつたけれども、祭政分離は諸政權の經驗しなければならぬ歴史上の事實であつた。

神と主權者との同殿同床が別殿別床になつたからといつて、それで宗教と政治とが完全に分離したのではない。政治の中にはなお多數の宗教的要素を持つており、宗教の中にもなお多數の政治的要素を持つていたのである。例へば延暦寺や興福寺を始として園城寺や高野山など多數の中世不院が僧兵を蓄へていたことにしても、不自然であり、不

思議に思う人々があるかも知れないが、それは宗教が純粹に近い形になつて來ている今日の考へ方であつて、當時にあつては寺院には宗教とともに政治も軍事も一緒にあつたのであつて、當時の人々はそれを決して不思議に思はなかつたばかりでなく、當然のこととして受取つたのである。

古代の神社や寺院は廣大な所領を持つていた。勿論それらの中には皇室貴族が寄附したものがあつたが、神社でいうと大部分は從來持つていたものが中失政權から認證せられたものであり、寺院でいつても貴族がその所領を寺院の名義に書きかへたに過ぎないというものが甚だ少くなかつた。それが中世になつて武家の政權が成立すると、地頭の侵略を受けて中分をするものが甚だ多く、ついで足利氏の幕府が成立すると半濟はんせいの制によつて半分を武家に奪はれ、戰國爭亂の世となると残つた分も奪はれ、そして近世に入ると秀吉の檢地によつて社寺は舊領の何十分の一を認められたに過ぎなくなり、政治や軍事の權はもとより經濟の上にも大きな打撃を蒙つた。しかしそれでも朱印地や除地の制度によつて徳川氏政權の下ではなお残された所領を抱へていたが、明治維新によつて朱印地は取上げられてしまつた。けれども社寺の中にはなお朱印地や除地を私有地の形で保有するものがあつたが、この度の敗戦後の農地改革によつてそれを完全に失つてしまつたのである。

鎌倉の中分、室町の半濟はんせい、秀吉の檢地、明治の上知、昭和の農地改革、それは社寺が所領を失つて行つた過程ではあるが、それはまた宗教が政治や軍事と分離して純粹化して來た過程でもあつたのである。

宗教が分離させて來たのは政治や軍事ばかりではない。學問や藝術おも分離させて來たのである。近世儒學の祖といはれる惺窩にしても道春にしても僧侶である。五山の禪林に佛教と共にあつた儒學が彼等の手によつて佛教から獨立したのが儒學の勃興であつたのである。日本では五山以前にも儒學はあつた。けれどもそれは政治と共にあつた儒學であり、學問として獨立して儒學ではない。そしてその政治が實はまた宗教と密接な關係にあつた政治なのである。大觀して、中世以前の學問は宗教と共にあつたといつてよい。學術もまた同様である。日本の中世以前の美術が佛教美術であつたことはいふまでもない。平曲や淨瑠璃などの聲樂にしてからが寺院に於ける聲明の變化進歩したものだといはれている。こんな有様で古代にあつては學問や藝術も政治や軍事と同様宗教と一緒にあつたのであり、それらのものを分離させて純粹化して來たというのが現在の宗教である。

歴史が示すところの宗教のあり方はその純粹化ということである。この純化ということはまた將來の宗教のあり方を示すものでなければならぬ。

ところが現在見るところの宗教界で最も活潑な活動をしているのはいわゆる新興宗教といつてよい。そしてこの新興宗教が既成宗教よりも多分に不純物を持つていることは事實である。これは上來私が述べて來た歴史の示す宗教のあり方に全く矛盾する。そこで上に述べて來た歴史的結論は誤つてはいないかとの疑いが生れる。けれどもこの歴史的な結論には決して誤りはないのである。

現代は民主的な時代だといはれる。それなのに非民主的なことが到るところで行はれている。これが實狀である。けれども社會が民主的になつて來てゐることは事實であり、それがまた歴史的な大勢である。非民主的な事柄の數々を見て將來は非民主的になつて行くと考えることは誤りである。不純物を澤山包含している新興宗教の隆昌を見て、將來の宗教がますます不純になつて行くと考えることの誤りであることはいうまでもない。

こゝで思い出されるのは法然上人や親鸞上人などの宗教活動である。それらの人々の說法には個々の場合多少の不純物を交へていたかも知れない。しかし大筋は純粹にして行こうという努力であつた。それなのにあの隆昌を見たのであつた。これは當時の民衆の知性が高度であつたというのではない。それならばそれは何故であつたらうか。

鎌倉初期の新宗教の興隆を源平時代からの社會不安が原因しているように説く人々が多い。この社會不安が人々の

宗教心に關係がないとは私はいち切らないが、宗教は個人の救済を目的とするもので社會の救済を目的とするものではないと私は思つてゐる。生命の不安はどんな時代にもある筈である。それは決して源平時代に限つたことではない。

鎌倉初期に於ける新宗教の興隆には、源平戦争以來の社會不安の外に、もつて重要な原因があつたと私は考へてゐる。それについてはこゝでは述べないが、法然上人や親鸞上人などについていへば、これらの人々は個人の精神的解放を行つてゐるのである。上層部の人々、貴族やその周圍それに準ずる人々だけが成佛ができたのを、庶民でも惡人でも極樂へ行けると説いて聞かせた。これは個人の解放である。これが人心を捕へないわけはない。しかしそれは精神的な解放である。

下層部の人々、勞働者の物質的解放を企てようというが、いや少くともそのように唱へてゐるのが今日の共產主義である。それが若い人々の心を捉へたことはいうまでもない。共產主義に對する彼等の態度は殆んど宗教的信仰といつてよい。それは共產主義が一種の新宗教であるからである。ところで新興宗教の興隆も實は共產主義の流行と一派相通するものである。既成宗教家はその現世利益を攻撃するが、この現在利益は一種の物質的解放である。この重要性を決して無視してはならない。

それにしても人間の物質的解放が宗教の在り方でないことは前に述べた通りである。そして法然上人や親鸞上人などの精神的な解放といつても、それが完全なものであつたとは私には考へられない。上は帝王から下は庶民に至るまで、だれでも極樂に往生することができるといふ。これは人間は本質には平等であり、人間の尊貴は身分の尊貴とは別であると教へたものであるが、それは生死の問題に限られていたのであつて、その他の分野、例へば思考の自由とか、辯論の自由とか、そのような面での解放はしていないのである。

思考の自由など、いうことは、凡そ宗教とは矛盾することのように思はれるであらう。日蓮宗に於ける折伏は最もよくこれを物語るものである。しかし一部の國家を除いてはそのように思考の自由を認めないといふことはもはや許されない筈である。日本の憲法でも信教の自由は保障しているのである。こういつたらそれは政治の上のことと、宗教では自分の宗旨以外は認めないのが本筋であるといふかも知れない。しかしそんな宗教はそれこそはや存在を認められないであらう。それがまた歴史的な宗教の在り方でもあるわけである。

勿論人間は不宗全な存在である。だから奇蹟が信ぜられるのは當然である。そしてまた奇蹟が信ぜられるような宗教でなければ、その宗教は宗教としての力が強くないこと

も事實である。いやそればかりではない現世利益を説く宗教でなければその力は強くないともいへる。それ故にこそ新興宗教は榮えるのであり、既成宗教にしても事實上これらの面を強く打出したことがあつたのである。しかし歴史の發展して行くこともまた事實である。歴史の發展の上からいへば、宗教は時代ととも純化されて行く。そして進歩して行く。こう私は考へている。

(昭和三一・七・一五) (大正大學史學科主任教授)

法語抄

問うていはく、攝取の益をかうぶる事は、平生か、臨終かいかむ。答えていはく、平生の時なり。阿彌陀佛は八萬四千の光明をはなちて照し給ふ。平の生時てらし初めて最後まで捨て給はぬなり。

——念佛往生要義抄——

彼岸と淨土教



松崎可定

現在我國に於ては、春秋二期に佛教週間とも云うべき「お彼岸」の行事が行はれ、その中日は「春分の日」又は「秋分の日」として國民の祝日に制定されて居りますが、まことにこれは佛教國日本として意義深く喜ばしい限りであります。願くばこの「お彼岸」が、尙一層生かされて、習俗的過去のなものから自覺的、將來的なものにまで高められ度いものです。それにはその由つて來つた本來の意味の彼岸についての理解が大切の様に考へます。

(9) 一般佛教的には、現實の苦しみと迷いの世界を此岸と見て、悟りと淨安の理想界を彼岸と見ますが、淨土教的には

厭うべき穢土を此岸となし、欣うべき淨土を彼岸と見るのです。故に此岸より彼岸に到る事が全佛教の目的であり、又一般的に人間の文化的努力は、悉く彼岸を目指しているものと云うべきでありましょう。ですから一應私達は彼岸をそのまま淨土と見て支障はないと存じますが、それだけに淨土教徒には彼岸は一層重要でなければなりません。それでは私達は、どの様に彼岸を理解すべきでありましょうか。私は一應次の三様に分けて考察したいと存じます。

第一には、この世に實現すべき淨土としての彼岸です。今日人類の文化は非常に進んで來たとは云い乍ら尙多く

の苦しみや不幸が存在致します。就中科學の進歩は却つて人類絶滅の危機さえ生み出しています。この様な深刻な問題に對して、平和を護り人類の生存を維持することは人類現下の課題でなくてはなりません。これなくしては人間の幸福はあり得ないからです。衆生救済を目的とする佛教徒は當然この問題と取組むべきであります。

勿論この事は非常な大問題で簡單には行きませんが、しかしながら進むべき方向を指示し、手段を教へる事は吾等にも可能であります。のみならず今や武力の限界を知りて、世界は道義優先の方向に進みつゝあります。國連の理念は元よりのこと、インドの慈悲、無傷害による獨立、セイロンの我國に對する「怨は怨みによりて鎮まらず」の宣言、中共の「怨に報ゆるに徳を以てする」と云つた様な行き方、或は現在の原水爆實驗禁止の運動等、これらは言はゞ宗教的な進み方ですらあります。

淨土教徒の仰ぐ無量壽經。その阿彌陀佛の願文に「弘誓の鎧をきて、徳本を積み累ねる」と云う語がありますが、これこそ吾等の進路を教へるものでなくてはなりません。日本は世界に先立つて憲法によつて武力放棄の大誓願を立てました。この上は須らく徳本を世界に積むべきであります。

す。日本の侵略を逆縁として立上つた、アジア諸國は今尙貧困と疾病その他の悩みを抱いて居ります。我國はその持てる力を以て、これらの國々の不請の友となるべきであります。この様な實踐による實績こそ、何物にも勝つた國の護りとなりましょう。人は或はそれは餘りに理想に過ると云うかも知れませんが、宗教が理想を忘れて何が理想を掲げましょうか。理想こそ彼岸であるからです。

釋尊の本生物語りは到彼岸の道として、猛壯な六波羅密の實踐を説いていますが、この利他の精神が、大乘菩薩の本願となるものであつて、本願は本來現實の問題解決を願つたものであり、而も個人的解決でなく、社會性を取上げた處に淨土教の本質を見るのであります。淨佛國土成就衆生、これこそ淨土教の本流でなくてはなりません。

しかしながら理想は理想として無くてはなりません、又これは完結のない道であります。宗教には無限の努力と同時に、一面に、完結と落着きが必要です。遠き彼方の彼岸と同時に現在の足下にも彼岸が無くてはならないのです。

よつて第二に足下に味い深むべき淨土としての彼岸が必要です。

現代思想は、やゝもすれば人間の幸福に至る條件を外的社會的に求める傾向があります。この事は近代的であり、佛教の緣起觀の要求する處でもある譯です。しかしながら大事なことは、この行き方のみでは人間の幸福は必ずしも得られないことです。外的條件の變更にも亦限度があり、而も人間の慾望には限度がないからです。人間幸福への道は、やはりこの問題との對決が必要です。現實を否定し改革すると同時に、現實を肯定し、自己を深める方向が必要なのです。

これは從來とも佛教の最も力を入れて來た處であり、やはり「知足安分」とか「隨處に主となる」とか又は「日々これ好日」と云つた様に、限られた環境や條件の中にあつて尙且つ喜びと生き甲斐を覺える生き方をするということです。吾が心樂しければ、見る物皆樂しと云う様に、心を淨めることによつて穢土をも寂光淨土と見得る智慧を身につけることです。自己内外の誘惑を排し得る自己の主人公となることであります。

(11)

原子力を支配することによつて、却つて人類の危機を將來しているが如きは、未だ人間が三毒煩惱の支配下にある故です。力を毒にも藥にも自由に使い得る様な自由人の育

成こそ佛教の目指す處であります。

二宮尊徳は「十錢取りて足らずんば、九錢取るべし。九錢取りて足らずんば、八錢取るべし」と云つていますが、これは現代思潮の重大な批判を含んで居ります。限られた限度の中にも尙生き得る生活態度の確立なくして徒らに收入の多きをのみ望む事によつて、果して幸福が保證されるでしょうか。不足、不充分の中にも生き得る力があつてこそ、始めて多く取ることによつて多くの幸福が得られるのです。足下に彼岸を見得る人にして眞に、彼方の彼岸にも到り得るでありましょう。

第三には、死後の世界としての、或は智の限界の彼方に輝く彼岸です。

これは、合理的思惟の挫折や、現實に敗れた絶望の極にも、尙慰めとも、救いともなる淨土です。從來とも淨土教の重んじて來ている處のものです。但し最近この様な淨土は非常に影が薄れて來ている様に思はれます。けれども、それは本來情意に於て見るべき處のものを、智によつてのみ見んとする誤りから來ているのです。死後の世界の如きは科學や合理主義によれば、當然否定せらるべきでしよう。しかしながらこれは「實在」であるの要はないので

す。業の存続は學問的にも認めるべきであります。今云う世界は人間の情意の要求であり、實踐的價值であるべきです。死後の世界や、永生の願いは、人類原始以來のものであります。現代に於ては、原始素朴のまゝでなく、純化されたものでなくてはなりません。それは智による科學の對象として見るべきものでなく、それとの兩立する立場に於て情意の働きとして素直に見ることです。

彼の臨終來迎を語る往生傳の數々は、死の闇黒と、苦惱を、光明と喜びに轉じている事實を物語るものであつて、この種の宗教經驗はやはり尊ぶべきものであり、現代心理學的にも認められるべきことでもあります。死刑囚とか、不治の病者等この世に希望を失つた者を救うよう適切な手段が他にあるでしょうか。彼の東條元大將始め戦犯者の多くが、西方淨土を欣はれた事實はこれを示しています。

人間は智によつて割切れるものではありません。情意は智の枠を越えても働くものです。この情意の良き働きの面を自覺的に取上げたのが淨土教であり、指方立相でなければなりません。従つてこの様な世界は、眼を舉げれば直ぐ見える世界ではなく、不斷の情意の訓練、教育の上に得られる世界です。或は人はこの様なものは夢幻的であると云

うかも知れませんが。しかしながら夢幻もまた人間には必要なのです。大切なことは、夢幻と現實の混同、智と情意の混亂を來さないことです。

新興宗教の多くは情意面の強調をして、肉體は心の影であるとか、信心によつて病氣も治り、願望成就する等と説いて事實相當の成果も擧げている様に見えますが、一方智の面、合理的思考を缺いている爲に、害毒も亦現はれていくのです。佛教は片寄りを離れて、中道を歩む教えです。人間知情意の精神活動の中何れか一つで以て他を押へてしまつてはいけません。『二二ガ四』の合理的思惟と同時に『二二ガ五の』非合理面をも認めなければなりません。

死の絶望をも救うものが、何んでその他の苦惱を救い得ない道理がありました。この様に見る時、吾が念佛の教えが非類なく尊いものに見直されるのです。

以上一應彼岸を三種に分けて説きましたが、これは個々に見ないで統一的に見るべきであつて、念佛相續によつて一念にも淨土を味いつゝ、現實の理想世界建設の方向に一歩づゝ進むのが念佛者の生活でありましょう。彼岸會を機に淨土について少しく考へて見た次第であります。

念佛三昧

權 藤 賢 祐

頗る振わない寺院の教化

永い間。佛教寺院が葬式法事を専門の如く營んで來たためか死と佛教とを結びつけて。何時の間にか佛教は殊に淨土念佛の信仰は全く死の宗教。未來主義一點張りであるかのように世間から誤解されて仕舞つた。之は我國宗教文化發展の上に此の上もない障害であり損失であつた。延いては今日、眞實な教化運動に努力する者の爲めに、どれ丈の大きな支障をうけて居るか分らない。尤も一面には舊態依然として死の宗教、未來主義の退えいの的な、お座なりの説教で済ましている向もあるようであるから、罪は何れにもあるような譯である。

斯様な状態であるから、佛教の意義ある講演會。修養會を開いてもなか／＼人が集らぬ。殊にこちらが一番の對照としてねらつてゐる有爲な働き盛りの青壯年層や智識階級といったような人々は、テンデ何處に行つても殆ど集つて來ない。それかといつて永い間寺院に關係づけられてゐる老人達でも、之にする亦大した堅固たる信仰の所有者とも思

われぬ。況や正確な信仰を身につけて、それを基礎として其の上に神聖、正義な生活を打立てゝいるような者は果して幾人あるだろうか。やゝもすれば信仰と生活とが二元的に考えられて、その信仰は殆んど概念的な習慣的なまた一種社交的なもので、その生活觀念も思い思いで何等信仰によつて基礎づけられてゐるようなものを看取することは出來ぬ。

實際これでは佛教寺院の教化力というものが甚だ疑わしく個人の上に家庭の上に、更に社會生活の上に、どれだけの價值と威力とを持つてゐるのか全く想見することが覺束ない。そうだとすれば葬式法事の外、寺院の存在が甚だあやぶまれても仕方なからう。

近年寺院の子弟が學校を出て來て、多くは教化人として活動するものは少く、地方の學校教職員若しくは會社銀行等に就職し、それによつて窮迫してゐる寺院經濟を安定しようとしてゐるものが少くない。之れも勿論やむを得ないことかも知れず、強ちそれが悪いとは言われまいが。併、これがため教化人としての研究も向上も亦その努力もな

く、經驗も出來かねて、寺院の教化力は益々弱體化する許りである。甚だ之れは心細く感ぜざるを得ない。

潑刺たる生の宗教

凡、淨佛國土、成就衆生が大乘佛教の根本精神である以上、社會を改善し、人格を完成することが何れの宗派でも其の目的は同一であるが、我等人間の現實生活は、事實、左まで美わしいものではない。所謂、疑惡醜であり、虛假雜毒であり、嫌怒痴である。絶えず生老病死等の四苦八苦に惱まされ、自由、幸福、光明、平和は畢竟、永遠の夢のようなものである。好まない病氣、災難は常に身邊に襲い來り、望まない失敗、蹉跌、失業の苦杯は脚下に湧き起つて來る。入學や就職は甚だ容易な事でない。經濟の不如意家庭の不和、近親間の睨み合い、老衰の悲しみ、孤獨の寂しさ等、數へ來たれば、それは／＼數限りもあるまい。之等の所有問題は實に確固たる信仰がなくては到底解決されるものではない。若、之を解決する信仰がなかつたとしたら其の結果はどうなるのか。それは結局、行き詰りである氣の小さい者は煩悶苦惱終に神經衰弱となり、精神異狀となり、自殺に終る。氣の大きい奴は自暴自棄となつて殺人、強盜、放火等怖ろしい慘憺たる犯罪事件にまで發展せずには終らない。滔々として現在社會の事實が示して居る。

斯の事實を視る時、どうして信仰を求めずいられようか。純正確實な信仰に眼醒ないで人生を過すこと危險これより大なるものはない。今之を救い、之を導いて、平和、幸福、感謝、光明の生活を與う。之より尊いことがまたと世にあるべきや。佛教の目的、念佛の生命は正に是にあり、敎家の天職、亦實に此に存する事を光榮とせねばならぬ。實にも選擇本願念佛を宗とする我が淨土教徒は正に清新潑刺たる生の宗教の宣傳者として選ばれた現代生活の士ではないか。

信ずる者のよろこび

由來、佛教は永い時代と曠い地域とに傳播されて來たので其間に其敎義も廣汎に涉り其の部門も亦多岐多端で内容も甚だ深遠である。自力敎、他力敎、難行道、易行道。聖道門、淨土門古來八萬四千の法門と云われている。爲めに稍もすれば「佛教はどうも六づかしい、解り難い」と言つて捨てゝ、近ずかない者がある。成る程、それはそうかも知れぬ。併、學門と求道とは自ら異なる。眞實、道を求め救いを得たいと思うならば必ずしも其の志は遂げられないことはない。一步譲つて佛教の入門、念佛の入信が多少六づかしいとしても事實煩悶、苦惱、悲哀、寂寞に堪へられない生活から終に翻然として歡喜、光明、法悅、感謝の新生活に更生しようとするならば、多少の苦勞は意とするに足

らないではあるまいか。霜雪を経なければ暖い春は來ない。少しの苦勞もなくして成功することは何れの方面にも許されない。

罪に汚れた浅ましい儚ない肉の我に死んで尊い永遠の靈の我に生きる。何の幸福が之れに過ぎるものがあるろう。絶體絶命の苦惱の生活から斷然、打つて變つた輝く希望の生命に轉換する。之を喜ばずに何をか喜ぼう。彼の聖傳教も聖法然も聖道元も古來の先德は皆悉く一人として肉を裂き骨を碎くような辛慘を嘗められなかつた者は一人もない。何れも慘憺たる荊刺の路を蹈んだ人達である。泡沫の如き此の身命財それ何ものぞ、一切を糞土の如く抛つても精進一番、道を求むべきではなからうか。

昔、禪宗の慧珂大師は達磨の前に臂を切つて雪中に鮮血を流し、傳法の志を表わし、終南の聖者善導大師は「別時念佛の道場に入らんとする者は妻子眷屬に永別の思いをなすべし」との遺訓を垂れ、自らも寒冷に汗を流して念佛三昧を行ぜられたと傳へられて居る。皆これ命がけの求道である。明治初年の大德、行誠和上に歌がある。

菩提の山は高けれど、修行の海は廣けれど

四弘誓願を杖として、ビルシヤナ城に進まなん

何と意味深く其決心の強いことであらう。

信仰は實に人生必須の無上の至寶である。倦まず撓まず退かず最後まで精進せねばならぬ。

むすび

我が佛教は、神道や基督教其他多くの宗教宗派が行つて居るように勿論葬式もすれば法事も營んでゐる。それでよいのである。それも尊い一つの傳道である。併、その葬式や法事をするからと謂つて、それを以つて直に死の宗教だとか、未來主義だと斷ずることは餘りにも淺薄卑近な見かたである。佛教はあらゆる人生の問題を解決し、人間の先天的に有つてゐる佛性を開發し化育して、敢て未來を待たず、現在唯今から、涅槃（永遠の生命、常恒の平和）菩提（完全な靈格）を増上して所謂、淨佛國土、成就衆生の大乗佛教の根本精神を顯現せしめる所謂、潑刺たる生の宗教である事を記せねばならぬ。

併、前述の如く佛教は其教義が多岐多端であるが、愈實行となれば我等は是に他力易行の念佛三昧の信行を選び、以て遠くは世尊の遺法たる佛教本來の精神に基き、近くは善導、法然等番々列祖の芳躅に測り、殊に最近明治大正の釋尊と憬仰し奉る偉聖、山崎辨榮上人が身を以て親しく體驗實證せられた光明念佛の慈訓によつて念佛三昧を實修する處、必ず其の驗あることを信ずる。

願くは有縁の同胞益々其信を同じくして、幸を俱にせられんことを念願してやまない。（おわり）

物の考え方



松 壽 弘 道

當地に來てより一年、つくづく考えさせられる事は、東西間の物の考え方相違です。

例えば、先日こんな事を経験しました。學校で或る日、本棚の上に載せておいたノートブックが無いのです。確かに置いていた事は

友人も目撃していましたが、丁度試験前でノートブックは誰にとつても必要なものです。

以前にも二回ばかり、その本棚から本を失つていたので早速先生の處へ届出ました。誰が見てもとられた事は一目瞭然です。其處で、

僕は先生に「Somebody stole my notebook.」と云つたのです。處が、ハット氣

がつきました。と云うのは實は英語の世界では、こう云う表現はまづいのです。日本語では許される表現でしょうが、英語ですと、只

「I lost my books.」と云つて、誰かにと

られたと云う、他人を中傷する表現法を省略して、只その行爲の結果たる、「失つた」實事しか述べられないのです。

試験も済んで、その日の午後、その本棚の上に少生のノートブックが発見されました。

明らかに誰かの所業です。早速、先生にその事を報告しましたら「誰かが間違つて持つて行かれたのでしよう」「Somebody might

wistakenly take your books.」でハッ(終り)です。

これはほんの、些細な事です、こちらでは全てがこの調子で、決して、他人を疑つたり中傷する事はつつしまねばならないのです。勿論、明らかな證據があり、事實として現われた時にのみ「盗まれた」と云う表現が使えるのです。日本人としては齒痒いのですが、郷に入りては郷に従わねばなりません。

此處で氣付く事は、どうも日本人の倫理的・精神構造は懷疑的精神の旺盛なる不信の上に立脚し、一方、米國人のそれは神への契約に基いた、信頼の上に立脚している様に考えられます。

以上、つまらぬ事を述べました。この結論についてくわしくトレース出来ないのが残念です。しかし小生の云わんとしている事は、前述の例で扱ひ取つて載けますでしょうか？

(ハーバード大學留學中)

×

×

×

×

殉教の聖僧 金光上人 (二)

開 米 智 鎧

二 宗論と入獄

間もなく上人は、正中山から、釣拋岳後に東丘と改めたに移つた。

衆人堂の所在地かも知れない。然るに此處は、北畠城主の花見の場所である。土地の百姓共は、上人手作りの小屋を次々に破壊して、上人を寄せつけない。上人は大に心痛して身代りの阿彌陀像を作り、南無阿彌陀佛の六字を、行脚の杖に記して、「奥州皆淨土化」の、悲願を立てた。此處が西方極樂堂で、東奥念佛最初の地である。

よつて止むなく、行丘に降つた。地頭甲野七衛門に、住地借用を願ひ出た。地頭は不審に思ひながら、馬捨森の片地を、貸し與へた。こゝに笹小屋を作つて、塹とし、雨の

降る日も、風吹く日にも、道行く人々に極樂は、是れ、阿彌陀佛の、現在說法するところと、辻說法したが、世人は嘲笑つて、一向に、耳をかす者がなかつたし、村の童は、小石を投げつけたり、小犬をけしかけたりしたが。上人は、一心不亂に念佛を唱布した。

こゝで上人は心を決して、四月九日、甲野七衛門を同伴して、泉の夷人部落に、布教した。修驗宗の本據を、衝いたワケである。泉崎大泉院現在の泉寺の住僧、正念坊は、大に怒つて、上人を、民治獄に留禁した。五月十六日地頭七衛門と、合浦の檢非遣使とは、共に上人の赦免を石化山の太光院に願ひ出たが、太光院の住僧、連珠法師は、之を聞き入れない。然るに法明坊修驗念佛宗の第三世は、上人を免して、大

泉院に招いて、親ら之を迎へて、佛法の夜話は明朝に至つた。然るに上人は、淨土宗を弘布せんとして、

上人 一、開祖は善導大師、中興は法然沙門、本尊は九品上生の阿彌陀如來、觀音勢至の一光三尊、經文は淨土の三部經、念佛三昧で極樂に往生する。

二、西方阿彌陀佛をのみ、主として唱へる者は、不死不滅の、安養淨土に住すること、疑ひない。

三、不知、不文、不具盲目の男女も、念佛を稱へれば、諸佛諸天の、來臨擁護を受ける。

法明坊 其の主唱は、我等既に宗祖行者から、傳聞してゐる然るに汝は、三國佛法の傳來は、諸僧諸仙人の、苦行の賜物で、之を皆、法然凡僧の、說法とするが如き大言は、汝は佛法の、風上にもおけぬ者である。我等は、汝等如きとは、天と地ほどに相違する。修驗宗は、獨立の宗旨でない。佛法は心である。心が正しくなければ、其の佛法も、正しくない。佛法を學ばんとする者は、先づ心を學べとは、宗祖行者の、常勅である。汝は至心に、六情根を懺悔せよ。諸佛世尊は、常に三世に住在し給ふ。然るに、汝等の故業障は、佛教を信ずるといへども、見佛することが出來ない。諸佛の智慧は、甚深無量である。其の智慧門は、解り難く入り難い。一切の衆生は、煩惱多きが故に、發心を失ふ。之を導く者は、我等である。

上人は、頭を下げて、

私は憍慢多い、凡僧であるが、汝の教へることは、佛心をおかす、衆生はこれで、必ず懈怠を生ずるだらう。憍慢と弊と懈怠とは、以て斯の法を信じ難いと主張したものらしい。

上人 汝は世にない者を、尊ぶのだ。役小角何者ぞや。

法明坊 汝は外道だ。

上人 汝こそ、外道だ。異教を弘めるのは、地獄の盲者だ。

法明坊 立ち退け。汝が如き凡僧は、修驗宗の大要を知らない。

と論争は、仲々に終らない。法明坊は、遂に大に怒つて、上人を追放した。

之を聞いて魔神山法身院の住僧空泉坊は、大に嘆いて、上人を藏王堂神魔山にあるに呼んだ、時に上人は涙を流して、

我は修驗宗を、新興の宗教と思ふて、輕んじたことは、免して下さい。以後我は役小角仙人を、我が師法然上人と同様崇拜しやり。上人は清水谷に下つて、行者の墓を拜して、仙術院を建て、大乘經一部を記し、是の地を、深々大慧山と稱して、更に老木の、卒塔婆を建てた。

平等大慧教、修驗宗の大師、役小角仙人は、本地垂迹の法を、廣宣流布した。仰ぎ願はくば、此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成じ、菩提心を發せん。

南無金剛不壞摩訶如來

南無金剛藏王權現

大本地阿彌陀佛此の三尊は後日解説する

上人は妄想から、實相を觀して、行者の墓前に向つて、懺悔し、大乘經を誦した。訛證文であらう。此等の資料は、全部修驗系統の民間資料であることを附記しておく。

元年六月十七日、上人の布教に依つて東日流江留間の全神山、荒吐黨は大に怒り、上人を誅せんとしたが、城の甲野七衛門は之を留めた、此の地の荒吐黨は、山の神の信仰と修驗宗の固定の信仰は地方民族に深く、上人の説法は仲々聞き入れない、そこで、一旦行丘に歸つたが、再度正中山に登つて、佛論を闘はした。論の内容は明かでないが、其の眞行は、佛の助力を得て、正中山應身院を、淨土に歸入することが、出來たので從來の寺號應身院を、正中山梵場寺とした。ボンとは、ボンニタイと云ふ夷人語で、柴山の義さいわいボンが、梵に通するので、梵の場、梵場寺と命名したものであらう。上人の論争で、直接効果のあがつたのは、此處だけだと思はれるが、上人は此處に長く在住せられたとは、考へられない。翌三年には、修驗念佛宗に轉向した、忍玄坊が、梵場寺の開山となつてゐる。上人の隨想錄、四年六月十五日の條に、「津刈の里に來て、多くの學問も無用なり、正中山に登つて、忍玄坊より、心を學ぶ」とある。學心とは、修驗宗苦行の、精神練磨法である。

二年六月十八日、吐血病に臥して地頭甲野七衛門に救ふされた、四月十九日、五月十三日、の隨想錄參照。上人の隨想錄二年七月十八日の條、「修驗の偉人。初めて知りし石化山」と石化山は、修驗宗一山の、總稱であるから、三山三身院の何れか、或は大光院か大泉院かで、宗論があつたものと、考へられるが、他の資料は、一切此の項に、觸れていない。同二十日の條、「口論は無用なり。我あやまりて、獄に入る」と。宗論の度ごとに、投獄されている。七十三日獄中の感想が、「淨土法、あまり限界せまきところあり、大は小に優るなり」以下文と云ひ、八月一日、「久々に見る、青天果しなし」と、出獄らしい記事がある。八月五日、「宗教に限りなし」以下文と云ひ、と。

石化山修驗宗の、三山三身院とは、魔神山の法身院、壺化山の報身院、正中山の應身院で、山岳修行の本據であり、何れも各々山上にある。山下の大光院は、修驗法華宗で、大泉院は、同じく修驗念佛宗であつた。其の他の寺堂は、直接こゝに關係がないから、省略する。此の三院も後世宗教政策の、犠牲となつて廢滅し、大光院は現在の郷社八幡宮の社僧となつて、事實消滅した。獨り大泉院は、修驗宗から修驗念佛宗に、更に三轉して、淨土念佛宗となり、僅に法明山大泉寺の、名目だけを傳へてゐる。

二年十一月八日、上人は、石化山の大光院に來て、淨土宗對修驗宗を、論争した。上人は遂に獄に入れられた。其

の内容は傳へていない。翌年二月十九日、甲野七衛門の願出によつて出獄した。二月三十日、大泉崎の法明院Ⅱ大泉院の支院に来て、浄土の經論、若干を献した。住僧は大に喜んで上人を迎へたが大光坊は之を燒き捨てた。惜しくも三部經を拜持すと。

上人述作と傳へる、末法念佛獨妙抄六卷は、其の浄土の經論Ⅱ浄土宗大要に、當るかも知れぬが、不傳故に、内容の検討は出来ない。題名から推して、獨留斯經、止住百歳を説かれたものかも知れぬ。此の事を、舉光坊記は、前年としてあるが、肝心の上人隨想錄は、三年の條は、全部かけている。

時に上人は、修驗宗に入門して、名を光法坊と改めた。

上人は妥協的に入門したか、修學的に、歸入したかは、問題であるが、然し上人の本心は、修驗宗の教理を欲しない。四月二十八日、其の名金光坊に歸つて、再び浄土宗を布教した。時に法明院の住僧は、大に怒つて、上人を投獄した。六月二十一日、地頭の願出によつて其の罪を免れて、上人は行丘に歸つた。再び浄土宗で、民衆を教化せんことを祈願した。

(未完)

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

御袈裟法衣御調進

○錦金欄

○特種織物

○御水引

○御打敷

○御幡

○稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新裝の稚兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺

東京都港區西久保巴町一〇六

宗務所

大正大學

御用達

芝中高校

野村法衣店

淑徳學園

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

— 小 説 —

津 戸 三 郎 (上)

鶴 田 湛 泉

十三才のとき伊豆蛭々島に流人となつて以來、命を救はれた池の禪尼の遺訓を守つて二十年間、持佛堂に閉ぢ籠つて、寫經と誦經三昧を日課としていた頼朝も、治承四年四月廿七日、叔父藏人十郎行家から似仁王の平氏討伐の令旨を賜ると、直ちに擧兵の準備にかかつた。

先づ藤九郎盛長を使者とし、小忠太光家を副使とし教書をもたせて、伊豆、相模、武藏の源氏略代の家人に、その旨を侍へて蹶起を促した。

この時、武藏國の住人、津戸三郎爲守の許にも、その由が傳へられて來た。

爲守の父津戸次郎爲廣は、義朝に仕へて武勇の誇れ高く、その昔保元平治の合戦には、義朝に従つて武功を建てた源氏譜代の臣であつた。

爲廣の三男爲守は、未だ十八才の若者であつたが、頼朝の招きに若い血をたぎらせて馳せ參じたのはいうまでもない。

激は諸方に飛ばされたが、雲行きを眺めて二の足を踏むものが多いのか、集つて來るものも期待した程ではない。

この間にも、頼朝の動きが早くも京に傳はつてか、平氏に「源氏追對」の宣旨が下つたとの噂さへ傳つた。こうなればぐづぐづして座して亡ぶよりはと、北條時政父子を初め集まつた近郷の地侍、伊豆の若者どもも同勢九十餘騎を卒へ、「續け殿ばら」とばかり、先づ近傍の八牧の山木判官兼隆の館を襲つて、兼隆を對ち取つてしまつた。兼隆は平家の傍親で伊豆の目代であつたからだ。

強きに従うのは人情である。

山木を一舉に賭つたとの勝報が一度び傳はると、相模の武士は、頼朝の膝下に次第に集つて來た。これらの武士は、小田原のあたりから、海岸づたいに伊豆山へ出て十國峠から伊豆へ入り追ひ集つてその數三百に達した。

旗擧げの小手調べに、山木を賭つて旗擧げの先幸よしと、頼朝は、次の策戰を練つた。

日頃神佛の加護を祈ることを怠らなかつた頼朝も、身邊多忙になつて來たので、續經三昧に暮す譯にはゆかず、伊豆權現の法音尼に今後の續經を委ねることとした。

やがて、相模の豪族三浦黨の軍勢が三浦を發足したときくと、それと合流するため、頼朝は、初秋の風もさわやかな八月十二日の早朝、勇士を卒へて十國峠を越え海岸傳ひから早川尻まで出向いた。

ところが早川の土地の武士が、

「こゝは軍馬の動きは至し難く、敵が若し湯本の方から山を踰へて取り圍んだ時には由々しき大事となり、人馬も遁れ難くなります。それよりむしろ米神石橋に陣を取る方が御味方に利ありと思われまする」

と進言した。

無勢の味方では、敵の包圍攻撃を受けると、退路を斷ち切られてしまふ恐れが多分あり、陣を布くには不利の地形と考へられたので、直ぐ石橋山へと引き返した。こゝは前方は海、後は山で、山と海との間には、伊豆へ通う街道があり、屈強な要害の地だつたので、その嶮に陣を構へて敵を待つた。時に二十三日寅の刻(午前四時)であつた。

中五郎惟重が持つ白旗の竿の先に、横様にしかと結びつけてある以仁王の令旨を仰いで參百の將士は、希望と感激に激血をたぎらせていた。

早くもこの由を知つた相模の勇將大庭三郎景親は、時を移さず弟股野景久、熊谷次郎直實、稻毛三郎重成等參千餘の精兵を率いて頼朝軍を殲滅してくれようと、石橋山の邊に陣を布き、兩軍一の谿谷を隔て雲をはらんで相對陣した。

伊東祐親は、別に手兵三百を率いて頼朝の陣の後の山に陣を張り、いざとなれば頼朝の背後を襲はんとの氣勢を示していた。

二

朝から曇つていた秋の空は早くも暮れ初め、ぼつり／＼と雨さへ降つて來た。

「あつ、あの火」

大庭の兵が叫んだ。

遙か東方酒匂川の邊にあたつて、黒煙が霧雨の中に、もく／＼とあがつて半天を覆ひ初めたのであつた。

丸子河邊に進出した三浦黨の兵が大庭黨の家屋を焼き拂ひ初めたらしい。

この火を眺めた景親は、

「ウム、あの火は、三浦が我等が出た後へ、早くも押し寄せて館へ火をかけたと見える。遷延すれば、三浦勢がこゝへ馳せ來れば、兩方面に敵を向へることは由々しきことである。早や既に黄昏に近づいたが、今の中に佐殿を片附けて、明日は三浦と一戦せずばなるまい」

急に開戦の合圖を命じ、一齊に鬨聲をあげた。

「大庭はいよ／＼仕かけて來たと見ゆるぞ、それ鎗矢を放て」
鳴を静めていた頼朝も、大庭の開戦に應ずる合圖を命じた。

「オ、」

と左右の兵は、鎗矢を引き絞つて大庭の陣へ弦音を立て、射込んだ。

兩軍の兵は競い立ち、我れ先きにと陣頭に進み出で名乗り合う、言葉合戦が山彦となつて谷に響き初めた。

どよめく喚聲や弦鳴が巻き起り、篠つく兩を冒して戦斗が始まつた、源氏も平家も共に音にきこえた坂東武士である。暗闇の中で打ちつ打たれつ、果ては組合となり、すぎましい亂戦となつた。

津戸三郎も、これぞ初陣ぞと、あたるを幸に切りまくつた。

敵の大將大庭の首級を擧げんと敵陣深く斬り込んだ佐奈田與一は、股野五郎と出逢ひ、龍虎相搏つていたが、終に股野のために討たれてしまつた。

烈しい戦は夜を徹して行はれ、曉に至つた。

餘一が戦死してからは、頼朝の軍は振はない。名を惜しむ勇士はこゝを先途と奮戦したが、多勢に無勢、北條時政の嫡子宗時も戦死し、味方は總崩れとなつてしまつた。今は頼朝も、殘兵を率いて土肥の山中さして退脚するの餘義なきに立ち至つた。

景親は、頼朝の姿を認めると、矢を放なつて迫つて來た。

この時大庭の陣から景親に俄かに、挑みかゝつた五六騎があつた。

「やゝ、おのれ家義、敵に通せしな」

嚇怒した大庭は、太刀をひらめかして家義に打つてかゝつた。

飯田五郎家義は、かねてから志を頼朝に通していたが、大庭の軍が路に列していたので馳せ參ずることも出來ず、機會を伺つていたのであつた。

「殿この間に早く」

家義と防戦している間に、危く虎口を脱することを得た頼朝は、杉山へと逃げ入つた。

折から、烈風は木梢を吹き折るやうに鳴り渡り歩行も困難なほどで、その上雨は強く、頼朝はズブ濡となつていた。

眞黒な雨夜の山谷を、諸兵もこゝかしこから峨々たる山を嶮をすべりながらよぢ登つて行つた。

僅かな兵が集まると、頼朝はともかく杉山の内堀口邊に陣を布いた。

夜が明けるともう敵は間近く來ている。

頼朝等を殲滅しようと、包圍陣をひし／＼と狹めて來たのであつた。

半兵を率いて追ひかけて來た景親は、馬を跋らして近づいて來た頼朝麾下の勇士は、折返しては防矢を射つた。

中にも、加藤景廉、大見實政、佐々木高綱、堀藤次等何れも響を並べて防ぎ戦つた。矢に當つて斃れる乗馬も少くない。

頼朝を的に八方から矢を射るのか、頼朝の身邊にはしきりに矢が落ちて來た。

矢面に立つた頼朝は、自ら矢を矢つぎ早やに射ていた。しかも無駄矢が一本もない手練である、見事敵を射とめていた。

この姿に佐々木高綱は、

「君御自身、弓矢をおとりになるとは大將軍の振舞ひとは覺えま

せぬ。そのための郎黨にございます。御名を賜うて拙者こゝに防矢仕ります。何はあれ、この場は速く落ち延べあれ」

と押しとめた。加藤景廉、すかさず頼朝の馬の口輪をとつて後へ引き廻した。

「ソレ、頼朝を逃がすな」と挑んで来る敵を殿（シンガリ）に残つた。定綱高綱の兄弟、矢種のあらんかぎり射まくつた。箭を射つくすと、弓を捨て太刀を抜きかざして敵中に斬り込み、

七度まで敵を追ひ屏かせ支へていた。

この間に頼朝は、雑木をかけ分け、道もない峻嶒な山坂を駆け上り、倒れかゝつた朽木に腰を下してほつと息をついた。

將兵は、ちりぐゝになつてしまつてつき従う者とはなない。嚴しく冷酷な敗戦である。

「殿、こゝにわたられましたか」

頼朝の安否に心をいためて捜し求めていた土肥實平は、安堵の胸をなげ下して傍にひざまづいた。

「實平も無事であつたか」

頼朝も實平の無事な姿に、感慨無量げに喜んだ。

頼朝は、暫し息をついていたが、やがて靜かに鎧を脱ぎ初めた。

三

杉山は領内狭く、もはや忍ぶべき所もないと思はれたし、大庭の重圍を脱しかねて、はや運のつきかと思つた。かう取つつめられては、今は萬策もつきて自害の他はないものと覺悟し、どこで自害しようかと、失き程から頼朝は死に場所を求めていたものらしい。

實平は、頼朝の態度に悲痛な面もちで、

「あつばれなお覺悟と見奉る。而らば、大將軍の最後の故實をお教へ申さん。先づ鎧はかう置くものでござる」

松葉を切つて鎧の下に敷いて、兜をその上に置いた。

頼朝は、髻を切り髪の中から二寸ばかりの銀製の佛像をうやうしく取り出して傍の岩の間に置いた。

實平は、

「はて、それは何でございまするか」

といぶかしげに問うた。

「これは三才の時、乳母が清水寺に參籠して夢想を蒙つて得たという聖觀世音像で、それ以來、この觀世音に深く歸依なし、今日まで肌身放たず持つていた。やがて頼朝が首になつた時、髻の中からこの様なものが出たとあらば、東夷^{アスマエビス}の物笑でとならう」

と、さわやかに微笑んで、

「南無觀世音」

と、掌を合せて、最後の敬虔な祈りをさゝげた。

「殿、あだには生命を斷ち給うな、時を待ち給うこそ上策、矢傷一つ負うておられぬが何よりの御武運のある證（アカシ）し、こゝは一時落ちのびて、再舉を期し候へ」

と、自害をいさめといめた。

頼朝も（思へば平家に捕はれて首切られるところを助かつた命、どこまでも生きとほうさう。死んではならぬ）と氣づいて、

「ウム」と大きくうなづいた。

その時、頼朝の跡をたづねていた飯田家義は、

「殿の御念珠が」

とひざまづいてさし出した。

頼朝は陣中にあつても、常に數珠を手首にかけていたが、亂軍のとき、いつの間にか落してしまつたのを、家義が拾ひとめて來たのであつた。

愛用の數珠が再び返つたことは、

「これも未だ武軍の滅びざるしるし」

と、頼朝を大きく信念づけるのであつた。

其の後、尙もきびしい大庭の追撃に逢ひ、朽木の洞に頼朝主從潜んでいたところを梶原景時の氣轉で、あやふくのがれることを得て、其の夜は一たん箱根にかくれたが、落人狩が更にきびしく、こゝも安全な隠れ場所ではなかつた。

廿五日には再び土肥に入り、廿六、七日と土肥の山中で日を送り廿八日夜が白ら／＼と明ける頃、敵の嚴重な圍みを脱して、やつと土肥の眞鶴の磯に出ることが出來た。

こゝから實平等に守られて扁丹に棹し、無念を吞んで安房へと脱出したのであつた。

頼朝は行方知れずになつたとも、或は穴を堀つて埋つたとも、又石を懷いて水に入つて自害したと種に世間に噂されていたが「頼朝は安房にあつて尙建在なり」との噂を耳にすると、津戸三郎は、安房へと馳せつけた。

石橋山での敗戦は、頼朝にとつて尊い試鍊であつた。

一時、安房國に遁れて再舉の計を、鎮重に立てゝいた頼朝は次第に勢力を得、治承四年十月六日、始めて鎌倉に入つて、こゝを源氏經營の策源地と定めることゝなつた。

かくて東國に兵を集めた頼朝は、やがて富士川に平家の大軍を迎へこれを戦はずして潰走せしめ、次いで一の谷の陣を追ひ落し屋島

へと走らしめた。

その度々の合戦に、津戸三郎は鎌倉の御家人として身命を賭して戦ひ、戦う毎にめざましい大功を建てゝいた。

津戸は、佐藤嗣信とは特に昵近であつたらしい。

嗣信は、義經が未だ遮那王と名乗つていた頃、鞍馬を出て奥州の藤原秀衡を頼つて行つた時、信夫（シノブ）の里の佐藤嗣信、忠信の兄弟は、自ら進んで家來となつて以來の義經股肱の臣であつた。勇士同志の間に結ばれた友情によつて、津戸の妹や姫は嗣信に嫁し、一子次若を得ていた。

四

元歷二年一月十一日、義經は屋島の平家に最後の打撃を加ふるため追對軍を催して京都を出發した。

十八日の眞夜中、折からの暴風を、この荒天こそ天の味方と、舟子も恐れて躊躇する荒れの眞つ只中を、決死の覺悟で百五十騎五般の舟に分乗して渡邊港を漕ぎ出た。

怒號する風、逆巻く怒濤、舟もさけ破れんとする危険を冒し荒れ狂ふ海を乗り切つて三日の行程を要するところを僅かに一夕にして阿波の勝浦に着した。全く決死の敢行であつた。疾風迅雷の速さである。

十九日の朝には、潮を蹴つて白旗を押し立て陸に上つた。

義經の軍は息もつかず屋島の本營に迫り、佐藤嗣信、同忠信、佐藤忠基等我れ先きにと内裏に押しよせ、内裏を初め館、宿所等の建物に火を放つた。黒煙天に聳える中を、本據を襲はれた平家は、一族逃げのび海上に浮び出でゝしまつた。

義經は田代冠者信綱、金子十郎、伊勢三郎等を相具して汀に馳せ向つた。

これを眺めて平家の猛將、能登守教經、上總五郎兵衛尉忠光、悪七兵衛尉景清等の勇士五百騎ばかり、それ〴〵小舟に乗せて焼拂はれた惣門の前の汀に逆襲を試みて來た。

かくて兩軍は海邊にて激戦となつた。

いつの戦にも陣頭に立つ義經は、陣頭に駒かけていた。その姿を眺めた教經は、一陣に進み出で大音聲に、

「源氏の御大將に見參のしるしに中ざしを參らせん。我が矢を受けて見られよ」

一族一の谷に討たれた憎みに燃えて、その恨み晴らさんと、義經を目かけて引きしぼつた。教經は、平家一と聞えた強弓の手並である。わけて騎射の名手であつた。

義經の郎黨は、「殿を討たすな」とばかり、佐藤兄弟、熊井太郎、辨慶等、何れも轡を並べて矢表に立ち塞がつた。

教經の目ざすは雜兵原ではない。

「そこ退き候へ、矢面の雜人ばら」

義經の兵を一揉にしてくれんと矢つき早やの手練に、鹿島六郎宗綱初めバタ〴〵と十騎餘り射落され、面前の鐵騎の壁が崩れて、華やかな義經の馬上姿がサツと現われた。その刹那ビタリと義經の胸板を狙ひをつけた。ヒュンと弦音が響く。

「あつ」

義經の郎黨が驚いた瞬間黒皮鎧の鎧を着た一騎、義經の面前へ駆けよつて身を以つて塞がつた。佐藤嗣信であつた。

嗣信は、左手の肩から右手の脇へ大矢に射ぬかれて血煙りたつて

馬の背から眞逆さまにとつと落ちた。

すかさず教經の童武者、菊王丸という十八才ながら大刀の剛の者走りよつて太刀を抜いて嗣信の首を掻き取らうとした。

「や、兄上を」

兄の危機に、忠信はひようと矢を放つた。

「あああつ」

草摺のあたり眞深く射貫かれて、菊王丸は悲鳴をあげ其の場に倒れた。

忠信の郎黨、八郎藤定、小太刀にて童武者の首を掻き取らうとするところを、

「おのれ、そはさせじ」

一氣に駒を馳せさせた教經、右手を伸ばして輕々と右脇へかゝへ込み濱邊に馳せもどつて「曳い」と、菊王者を舟へ投げ込み自分も續いてヒラリと舟に飛び乗つた。

菊王丸は以前越前三位通盛の童武者であつたが、通盛戦死後は教經が引きとり、日頃傍をも離さず寵愛していたので、敵に骸をさらすも不憫と沖へ漕ぎ出してしまつた。

一方、忠信は兄の嗣信を肩にして深いなげきと共に、陣の後方へ歸つて來た。

馬から下りた義經、嗣信を胸に抱きよせ膝を枕にさせ、手を握つて、

「しつかりいたせ、嗣信」

と勵ました。

薄目を開いた嗣信、

「我が君、三郎兵衛もこれまでいいございまする」

「氣を落すな、傷は浅いぞ」

「いえ、もう、所詮」

義經、早や目をうるませて、

「ウム、——そちの志、厚くうけるぞ、思ひ置く事はなきや」

「弓矢とる身の習ひ、敵の矢にあたつて主君の命に代はるは、かねて存ずるところ。源平の戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信という者、屋島の磯で主君の身替となつて討たれたりと未代まで語り傳へられるが、今生の面目、冥途への思ひ出にございまする」

「嗣信、來世も必ず主従ぞ」

「かたじけなう存じまする」

と一言残してニツコリと笑つてガクリと息絶えた。

「さても不憫な」

さしも猛き義經も、戦塵によごれた鎧の袖をぬらした。數珠もみ底し誦經する辯慶の目にも、苦難を共にした戦友の死に涙が光つてゐる。

嗣信の戦死を厚くいたんだ義經は、近くの僧を招いてねんごろな讀經をたのみ、この後の追善供養にと、愛馬の大夫黒をおしげもなく布施として僧に與へた。

いつしか矢音も絶え、日は既に暮れかゝつていた。

(未完)

宗祖法然上人七百五十年御忌記念出版

浄土宗日常勤行式

中 賣 發

○定價 一部金三十五圓

十部以上(一部につき三二圓)

百部以上(一部につき三〇圓)

送料實費

○オフセット・美麗折本(香澤梵成師名筆)

内容(和讃勸式付)(吉田定久譯)

△香偈 △三寶禮 △三奉請 △歡佛偈 △懺悔偈 △三尊禮

△開經偈 △四誓偈 △本誓偈 △一枚起請文 △攝益偈

△念佛一會 △別回向偈 △總回向偈 △四弘誓願偈 △三身

禮 △送佛偈

お申込は

東京都港区芝公園十九號地浄土宗務所内

浄土宗教化團中央本部

振替東京六一九三九番
電話芝(43)一三八二番

講	經
話	典

阿彌陀經の理解 (三)

福 富 海 岳

正報莊嚴について

極樂の正報莊嚴について、觀經に眞身觀の前に像想觀が明かにされ、

「名づけて麤想をもて極樂世界を見るとす是れを像想とし第八の觀と名づく」

とあり、又雜想觀の中には、

「阿彌陀佛は神通如意にして十方の國に於いて變現し給ふこと自在なり或は大身を現すれば虚空の中に滿ち或は小身を現すれば丈六八尺なり」

と記されている。すなわち佛像を通じて小身の彌陀を拜することができるということである。小身の彌陀を拜すること

が可能である以上、小淨土の莊嚴もまた可能であるに相違ない。

一、小身の阿彌陀佛

淨土宗寺院の多くは淨土三部經、就中觀無量壽經に立脚し、彌陀三尊兩大師等の尊像が安置され、歷代住職を中心に檀信徒の奉仕が続けられているが、これは明かに小身の彌陀を中心に小淨土が建設されているに外ならない。ことに法然上人は勅傳第三十六に

「法蓮房申さく、古來の先德みなその遺跡あり。然るに今精舍一字も建立なし。御入滅（御往生）の後いづくをもてか御遺跡とすべきやと。上人答へ給はく、あとを

一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆゑ如何となれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば念佛を修せんところは海人漁人がとまやまでも予が遺跡なるべしとぞ、仰せられける。」

という實に尊いお言葉を申されており、尊像が安置されお念佛が相續されている限り、淨土に往生された報身の法然上人が、小身の阿彌陀佛と共に寺院を中心とする小淨土に在すことは否定されない。まことに有難いことであるといわなければならぬ。かくてこそ寺院存立の意義があるのである。

二、大身の阿彌陀佛

大身の阿彌陀佛といい小身の阿彌陀佛というも本質的には何等變るところがなく、衆生の機縁にしたがつて千變萬化し給うに過ぎない。このことは相好光明說法度生等一切の事柄についてもまた同一で、眞に應化自在に在すのである。なぜなら彌陀は四十八願の成就者であり、別しては光明無量、壽命無量、念佛往生の本願の成就者であるからである。すなわち大經の第十八願に、

「もし我れ佛を得たらむに十方の衆生至心に信樂して我が國に生ぜむと欲して乃至十念せむに若し生ぜずば正覺を取らじ」

とあつてその救いの對象は十方衆生であり、佛の大智大悲の廣大無邊なるは言葉を以て説明することが出来ない。しかもその救われる方法が單なる稱名念佛であるということは、佛の大智大悲の結晶とみる外はない。従つて法身でも應身でもなく、兆載永劫に於ける苦修鍊行を積重ねた結果の報身ということにならざるを得ない。我々人間が救われる立場からは、どうしても人格を通さなければならず、この大宇宙に電磁氣あり原子力があつても、幾多の人格を通し辛酸努力が加えられなければ、その電磁氣又は原子力を日常生活に受用することができないと同様である。法藏菩薩が本願を成就されたことは、法身に本具する大智大悲の自然ではあつても、菩薩によつて代表せられる大人格の思惟と苦修鍊行なしには不可能であつたと解せざるを得ない。殊に十惡五逆の者までも救われ得ることは實に容易ならぬものがあり、菩薩の本願成就によつて大智大悲の深さと念佛往生の必然性が理解される。

勅傳第十六によると、高野の明遍僧都が出離の道を求め法然上人所造の選擇集を披見し、この書のおもむきいさゝか偏執ありと思つて寢られた夜の夢に……、天王寺の西門に澤山の病人があつて、一人の聖者が鉢に粥を入れ、匙で病人の口ごとに入れておられるのをみて、誰人かと尋ねられたところ、法然上人である……とみて、さめられてから、「われ選擇集を偏執の文なりと思つたのをいましめられた

夢なるべし。この上人は機と時を知りたる聖なるべし。」
 といつて深く反省し、専修念佛の門に入られたことが明かにされている。實に何とも名狀することのできない深い有難さで、大經の第十八願に示された佛の大智大悲そのものである。法身でも應身でもなく受用身である報身佛とお念佛の有難さが染々と理解される。

そこで問題となるのは法華經壽量品の久遠實成の本佛と淨土三部經の無量壽佛との關係である。これは法華經たると淨土經たるとを問わす無量壽佛自體に相違のあるべき道理はないから、久遠實成というも十劫正覺といふも結局は同一であると思う。乃往過去久遠無量不可思議無失數劫に錠光如來が世に興出し、五十三佛が相次ぎ、最後に出世せられた世自在王如來が應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊であり、法藏菩薩はその教に従つて説の如く修行して成佛せられたのであるから、五十三佛は名前は相違していても報身の體は全く同一である。とみるべきである。その相違は一に念佛往生の本願が成就されたことにあるのである。従つて我等は念佛往生の本願が如何に尊いものであるかを知らねばならぬ。本經に於いて十方諸佛が證誠勸化護念讚嘆されている所以である。この念佛往生の事實がなければ如何に彼の佛の壽命が無量であつても、それは全く問題にならない。彼の佛の壽命及び受化の人民が無量無邊阿僧祇劫であり「阿彌陀」と申すことがで

きるのは一に念佛往生の本願が成就されたからで正確には無量壽佛になられてから十劫といふのでなく、念佛往生の本願が成就されから十劫と解すべきである。このことは本經の六方段の西方段の第一に無量壽佛の名前があり、十方の中心である西方極樂世界の阿彌陀佛を證誠勸化讚嘆されていることによつて一層明瞭であらう。なぜなら同名同佛が證誠讚嘆される理由がないからで、また單信口稱の故に受化の人民が無量であることは當然である。

三、聖衆莊嚴

極樂は不死の國であり、限りなき光明と智慧と慈悲の國であり、しかも佛は常にその限りなき生命と光明と智慧と慈悲とをもつて十方の國の衆生（念佛の衆生）を攝取し慈育し給うのであるから、十方の國の衆生がその智慧と慈悲等を求めて往生し來る人民が無量無邊阿僧祇劫であることは、人類の自然であり、何等の説明も要せず誰人にも理解されるだらう。その中に無量無邊の聲聞弟子があつて阿羅漢であり、また限らない數の菩薩があつて、共に悉く不退轉であり、不退轉の故に一生補處の菩薩が澤山であることも理解されるだらう。殊に淨土の有難さは往生し來る無量の人民がこれら上善人と完全に俱會一處であるといふことで、このような淨土が理解されれば發願して往生を願わ

ない者は一人としていない。

そこで、極樂の依報莊嚴というも主莊嚴といふもみなこの聖衆莊嚴にある。それは極樂淨土が莊嚴される目的が、人間の人格完成にあるからで、法然上人の「阿彌陀經釋」によると、

「乃至若し生々世々の父母、師長、妻子、眷屬、朋友、知識等に相見えんと欲せば、當に發願して極樂に往生すべし」

と仰せられているが、極樂が人類最高理想の淨土である限り必ずこうあらなければならない。人類の淨土が人間の現實から遊離してなんの價值があり、生命があるか。私たちが淨土に往生することは、必ず父母祖先の膝下に歸ることとなくてはならない。もし淨土に往生する者が、父母祖先や師長妻子と別々であるというなら、この現實から完全に遊離し、全く意味のないことになる。それ故に釋尊は觀經に於いて韋提希夫人に對し「阿彌陀佛はこゝを去ること遠からず」と仰せられているのである。すなわちこの現實から遊離したところに十萬億佛土があるのでなく、下々品の往生人も一聲の念佛によつて現實に八十億劫生死の罪が除かれるのである現實と淨土との間は紙一重であり、念佛すれば必ずその紙が除かれる。經に一日乃至七日念佛して一心不亂なれば佛は必ず私たちの前に現在其前し給うと説かれてあるのがそれである。

念 佛 往 生

極樂が光明と壽命と智慧と慈悲との本源である以上、人類のすべてがそこに往生することが自然である。だから彌陀の淨土に多數の往生人がいてその數が無量無限であることは決して不思議ではないのだ。そのためにどうしても大智大慈の結晶である佛の本願に従う必要がある。法然上人は「三部經大意」の中で

「世間の人の眼に見つべく信じつべきが如きは、明はよく暗を破し、空はよく有を含み、地はよく載養し、水はよく生潤し、火はよく成壞するが如し。」

と仰せられているが、私たちが念佛して往生することができるのは全く右のお言葉の通り大智大悲の自然で、決して理窟ではない。法然上人はまた「一紙小消息」の中で、

「受け難き人身を受けて、あひがたき本願にあひて、おこし難き道心を發して、離れ難き輪廻の里を離れて、生れがたき淨土に往生せんこと、悦の中の悦びなり。」

と示されているが、念佛して往生させて戴けるのであるから、念佛が少善根でなく大善根であることはもとよりで、既にかく人身を受け得たことが過去世に於ける大善根の結果である。經に念佛が少善根福德の因縁でなしに大善根であることは、法然上人のみ教に従つて念佛させて戴く

ことによつて、その一聲々々の中に理解されることである。されば、勅傳第四十五には

「念佛にもものうき人は、無量のたからを失べき人なり。念佛にいさみある人は無邊のさとりをひらくべき人なり。」

とある。従つてもし善男子善女人あつて阿彌陀佛を説くことをきいて稱名念佛すること一日乃至七日一心不亂なれば、阿彌陀佛が諸の聖衆と與に現在其前し給ひ、命終の時に臨んで心顛倒せず間違なく極樂國土に往生することができる。しかもそれは臨終に限られたことではなく、「念佛往生要義抄」に、

「問うて云く、攝取の益をかうぶる事は平生か臨終か如何、

答へて云く、平生の時なり。その故は往生の心まことにわが身を疑ふことなく、來迎をまつ人はこれ三心具足の念佛申す人なり。この三心具足しぬれば、必ず極樂に生るといふことは觀經の説なり。かゝる志ある人を阿彌陀佛は八萬四千の光明をはなちて照らし給ふ也。平生の時照しはじめて最後まで捨て給はぬなり。故に不捨の誓約とは申す也」

とする通り。明かに現實である。

(未完)

浄土の會員を一人でも多く

◆どなたでも會員になれます。

◆會費は半年二〇〇圓、年額四〇〇圓です。

◆會員には毎月浄土を配布します。

◆この會は皆様の會ですからその發展の爲に、
お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰
運動をひろめましょう。お知合の方にぜひおす
ゝめ下さい。

◆お申込は振替(東京八二一八七番)を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰會

編集後記

○暑い夏と共に、水魔の季節がや
つて来る。日本の四季おり／＼の
なかにも、こればかりは有難くな
い。

○九州の諫早、大村地方を襲った
水害もひどいらしい。宗務所の教
學部藤木主事がその見舞に行かれ
て、いみじくも語っていた事は、
マスコミの波に乗つて我々に傳
えられるニュースを、我々は自分
の環境の中で判断するが、その判
断はマトを得ないものだ。

○読者の中にも、この苦に會つて
おられる方もあることでしょう。
衷心御見舞申し上げます。

○お盆と施餓鬼がすみほつとした
處。

宗務所内も、教師養成講座が過
ぎ一段落、次の行事は、九月二十
八日から四日間、第九十四回教學
高等講習會が、熱海の誓欣院で開
かれる。講師と講題は

一、宗義精要

清淨華院法主 石橋誠道上人

一、佛教の歸結としての淨土教

佛教大學教授 高島寛我先生

一、謠曲にあらわれたる佛教

淨土宗々務長 渡邊眞海上人

一、創價學會はどこまで伸びるか

大正大學教授 竹中信常先生

一、淨土法事讃

入西玄榮師 吉水大信師

と、内容に富んだ講習會である。

○本誌の竹中先生、益々多忙であ
る。八月十五、六、七日の三日間
NHKより「法然上人と念佛」を
放送されたし。

○經濟不況の波に乗つて、外觀は
ハデではあるが、出版パクニック
の話も聞くようだ。先に河出書房
が、最近角川書店、大月書房が
その浮目を見ているとか、その中
にあつて、本誌も、想像に絶した
努力で切り抜けている。發展の爲
にも何分とも會員の御つれを御紹
介下さい。

○本誌に「物の考え方」を通信下
さつた。ハワイに留學中であつた
松濤弘道君、今度ハーバード大學
博士課程に入學された。通信の片

端に

修士課程のつもりで出願したの

ですが、博士課程を指定されたの
で、とまどつています。しかし出
来る限りの事を入學の曉に致した
と思つています。

と、お目出とうと共に御研鑽の
程を

○少々私事に亘つて恐縮ですが、
小生が本誌にたずさわつてより二
年たつた。色々な事が過ぎ去つた
中でも、本誌の柱とも云うべき、
吉田絃二郎先生の死は、事あるご
とに思い出されるし、また、先輩
達の努力のあとを見聞きして、ど
ろ沼の中にもがいていて、一步も
踏み出せずにいるのは、我ながら
はがゆくもあり、申譯なく思つて
おります。世の移り變りは烈し
い、そして、何にもかも時の流れ
をとめることは出来ない。その中
にあつて、未來に向つて努力いた
します。御叱正の程を願います。

(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇
圓です。前金切の節は、精算
通知を致しますから、折返し
御送金下さい。御送金は便利
で安全確實な振替を利用して
下さい、千圓まで二五圓の手
數料で且、通信も書けます。
新しい市は必ず縣名を、又、
新規か繼續會員かを明記して
下さい。

「淨土」 八月 號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年七月廿五日印刷
昭和三十三年八月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信 常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

若い世代の人々のために!!

大正大學教授
竹中 信 常 著

宗教心理の研究

定價A五判五九〇頁
B五判一〇〇頁
C五判一〇〇頁
D五判一〇〇頁
E五判一〇〇頁
F五判一〇〇頁
G五判一〇〇頁
H五判一〇〇頁
I五判一〇〇頁
J五判一〇〇頁
K五判一〇〇頁
L五判一〇〇頁
M五判一〇〇頁
N五判一〇〇頁
O五判一〇〇頁
P五判一〇〇頁
Q五判一〇〇頁
R五判一〇〇頁
S五判一〇〇頁
T五判一〇〇頁
U五判一〇〇頁
V五判一〇〇頁
W五判一〇〇頁
X五判一〇〇頁
Y五判一〇〇頁
Z五判一〇〇頁

宗教が現代人の心理にどのような受けとられているかという
ことを、古來の學說史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗感心等をテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に傳へんとする者にとつて必讀の書である。

東京都中央区京橋二の一(鹽山ビル)

發行所

青

山

書

院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取 扱

法

然

上

人

振替東京 八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

指導外語教授増谷文雄 畫中村ひろし
監修東大、大正講師
教 育 法 然 さ ま
まん畫

定價B五判一〇〇頁
C五判一〇〇頁
D五判一〇〇頁
E五判一〇〇頁
F五判一〇〇頁
G五判一〇〇頁
H五判一〇〇頁
I五判一〇〇頁
J五判一〇〇頁
K五判一〇〇頁
L五判一〇〇頁
M五判一〇〇頁
N五判一〇〇頁
O五判一〇〇頁
P五判一〇〇頁
Q五判一〇〇頁
R五判一〇〇頁
S五判一〇〇頁
T五判一〇〇頁
U五判一〇〇頁
V五判一〇〇頁
W五判一〇〇頁
X五判一〇〇頁
Y五判一〇〇頁
Z五判一〇〇頁

者 淨土門主
大正大學長
増上寺法主
知恩院執事長
淨土宗務長

岸 信 宏 貌 下
椎 尾 辨 匡 大 僧 正
香 月 善 裕 師
渡 邊 眞 海 師

この本は繪ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御
教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き
出したものであります。しかも、その内容は、國寶「勅修御
傳」によつたものであります。

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

銀ブランコ2人乗	¥ 13,300
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タログ送

配達實費(都内横濱 500 圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町7 1 8
電(75) 1024(池上驛東3分)

幼稚園 運動遊具
全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ッ トーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。